

【息を引き取られた】

[受難物語講解・第26回]

『マルコの福音書』

15章35～37節

熊谷 徹

2014年5月4日(第1主日)

茅ヶ崎同盟教会礼拝説教

【序】ハイドンとシュッツの『十字架上の七つの言葉』;

紀元30年4月7日、金曜日、「午前9時」、イエス・キリストは十字架につけられた。その日キリストは十字架上で七つの言葉を残した。その七つの言葉をもとに作られた名曲がある。一つは、シュッツのオラトリオ『十字架上の七つの言葉』、もう一つは、ハイドンの管弦楽『十字架上の七つの言葉』である。

「十字架上の第一の言葉」は「父よ、彼らを赦したまえ」である。第二の言葉は悔い改めた強盗に言った言葉;「あなたは今日わたしと共にパラダイスにいる」。第三の言葉は母マリヤを弟子ヨハネに託して言った言葉;「あなたの子、あなたの母」。シュッツの『十字架上の七つの言葉』は第二の言葉と第三の言葉はこれと逆順で、第四の言葉が、マルコ15章34節;「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ。わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」である。

【1】第4の言葉への反応(35節);

主イエスは第四の言葉を「大きな声で叫んだ」。その叫びを聞いた幾人かがその声に反応した。35節;「そばに立っていた幾人かが、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる。」と言った。」。

この「十字架上の第四の言葉」の意味については前回「十字架上の叫び」と題して語ったので繰り返さないが、今日はこの叫びを聞いた人たちの反応についてもう少し見ておきたい。先ず、「そばに立っていた幾人」とは誰なのか。ユダヤ人か、ローマ兵士か?…これについては二つの説がある。

①一つはユダヤ人だとする説である。しかし、ユダヤ人たちが「エロイ(わが神)」という神への呼びかけを人間の名前「エリヤ」と聞き間違えるということは考えにくい。単純な聞き間違いではないとすれば、これは意図的な悪意ある聞き間違いである。即ち、彼らは、イエスが「エローイ、エローイ。わが神。わが神」と神に向かって叫んでいるということを百も承知の上で、「おい、聞いたか。エーリーヤー、エーリーヤーと叫んだぞ。預言者エリヤを呼んでいるのだ」と言ったのである。最後の最後まで彼らはイエスを愚弄するのである。ユダヤ人にとって「エリヤ」は

イスラエル史上最大の預言者である。ユダヤの民衆は、「世の終わりに大預言者エリヤが再臨する。そして義人を苦しみから助け出してくれる」と信じていた。この場面にいたユダヤ人たち、恐らく祭司長や律法学者たちは、民衆のその信仰を利用して、イエスを嘲笑しているのである。

②第二はローマの兵士だとする説である。「そばに立っていた」とあることから、ローマ兵士と解する方が自然である。また、アラム語を知らないローマ兵士たちが「エロイ、エロイ」という言葉を「エリヤ、エリヤ」と聞き間違えた可能性は大きい。彼らはユダヤ人との接触の中で預言者エリヤのことぐらいいは知っていた筈である。だから単純に「エリヤという預言者の名を呼んでいるのだ」と思ったのであろう。私達としては、このローマ兵士説の方を採ることにしたい。

【2】酸いぶどう酒(36節)；

(1)キリストは、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ。わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」と叫んだ後、「十字架上の第五の言葉」を口にした。それが「私は渇く」(ヨハネ 19:28)という言葉、たった一語の言葉である。この言葉を聞いたローマ兵士が、イエスにぶどう酒を飲ませた。36節前半；「すると、ひとりが走って行って、海綿に酸いぶどう酒を含ませ、それを葦の棒につけて、イエスに飲ませようとしながら言った。」。

「酸いぶどう酒」は23節に出て来た「没薬を混ぜたぶどう酒」とは全くの別物である。「酸いぶどう酒」の原文は単に「酢(oksos)」である。だがこの酢は「ぶどう」を発酵させて「葡萄酒」のようにしたものを水で薄めたものである。だから美味しい葡萄酒と違って酸っぱい。「酢」と訳しても良いのだが、ただの「酢」とは違うのだということを伝えたくて「酸いぶどう酒」と訳したのであろう。この酢は喉の「渇き」を潤すのに適した飲み物だったので、ローマ兵や水夫たちが愛用した。勿論この場面にいた兵士達もそうである。

(2)「私は渴く」とのイエスの言葉に反応したローマ兵が、「**酔(酸いぶどう酒)**を海綿にたっぷり含ませ、それを葦の棒につけた」。「海綿(spoggos)」は英語の「スポンジ」の語源である。「**含ませ(gemizo)**」と訳された言葉は「いっぱいにする;満たす」という言葉で、「たっぷり含ませた」という意味である。ローマ兵は、その海綿を葦の棒の先につけて主イエスの口元に運び、その酔を「**彼に飲ませた**」(原文直訳)。そして仲間の兵士達に向かってこう「**言った**」;36節後半;「**エリヤがやって来て、彼を降ろすかどうか、私たちは見ることにしよう**」。勿論彼らは「エリヤがやって来る」などとは少しも思っていない。主イエスをからかってこう言っているだけである。こうして主イエスは、最後の最後まで人々から嘲られ罵られつつ、十字架の苦しみを忍ばれたのである。

【3】息を引き取られた(37節);

(1)十字架は残酷である。当時のローマの政治家・哲学者キケロをして、「最も残忍なる拷問。わがローマ最大の恥」と言わせ、古代ユダヤの歴史家ヨセフオスをして、「数ある死の中で最も哀れな死。人間が発明した最も恥ずべき残忍な死」と言わせた処刑法である。主イエスはその残酷で残忍な十字架刑を受けられたのである。

主イエスは、十字架を背負ってヴィア・ドロロサ(悲しみの道)を歩み、ゴルゴタの丘に到着した。兵士達はキリストが担いで来た横木を、予めそこに用意しておいた巨大な縦木に組み合わせて十字架を作り地面に置いた。その十字架の上にキリストを押し倒した。そして主イエスの腕を横木に押さえ付け、別の兵士が体を動かさないように押さえた。そして、他の兵士が、主イエスの手首に、長さ13センチ程ある太い釘を打ち込んだ。鈍い音と共に手首が裂け、真っ赤な血が飛び散った。主イエスの全身を凄まじい苦痛が走り、その顔は苦痛に歪んだ。その時である。この世のものとは思えない言葉が発せられたのは…。「父よ。彼らをお赦し下さい。彼らは自分が何をしているのか分からないのです」(Lk23:34)。これが、「十字架上の第一の言葉」である。処刑役の兵士は、もう片方の手首に釘を打ち込んだ後、両足を「く」の字に

重ね合わせ、長さ20センチ程もある太い釘で一気に打ち抜いた。こうして主イエスの体を磔にした十字架を、ゴルゴタの丘に立てたのである。

十字架の上でキリストは、激しい苦痛に耐えた。猛烈な苦痛に襲われる度に主イエスは首を左右に動かした。その時、キリストの目に映ったのは、自分を見つめる人々の顔である。妬みと嫉妬に満ちた祭司や律法学者たちの嘲笑う顔があった。ご自分の手足に釘を打ち込んだ兵士もいた。かつてはご自分をメシヤと信じてついて来たのに、背を向けて去って行った人達もいた。どこまでも彼を愛し、慕う人達もいた。悲しみの涙で目を真っ赤にしている母マリヤの顔もあった。

(2) やがてキリストの体はダラリとずり落ちて来た。全体重が釘を打ち込まれた手首にかかり、猛烈な痛みが手から肩へ、更に脳天へと走った。両腕はダラリと伸び、大きなV字形を描いた。そのため息を吸い込むことが出来なくなった。そこで足に体重を移して、体を伸ばそうと試みる。すると今度は、足先に激痛が走りその激痛が脳天へと突き抜ける。その激痛に耐えながら、ゆっくり、少しずつ、体を持ち上げて行った。そして、溺れかけている人が水面に顔を出した時やっとの思いで息を吸い込むように、せわしく息を吸い込んだ。だがその状態も長くは続かなかった。痛みと疲労のために体がずり落ちて来たからである。足は再び「くの字」に折れ曲がる。そして全体重が手首にかかる…。これが何度も何度も、数時間に渡って繰り返された。十字架の縦木には、囚人が腰をかけることができるように小さな板が設置されることもあった。ただしそれは囚人への同情のためではない。囚人の痛みと苦しみを少しでも長引かせるためなのである。十字架はどこまでも残忍で残酷な処刑法であった。

(3) 主イエスが十字架につけられてからすでに6時間が過ぎようとしていた。いよいよ主イエスが地上の生涯を閉じる時がやって来た。37節；「それから、イエスは大声をあげて息を引き取られた。」

「息を引き取られた(eksepneusen)」は直訳的には「霊を吐き出した」或いは

「息を吐き出した」で、日本語の「引き取った」とは正反対の表現である。主イエスは「息を引き取られる」直前に「大声を上げた」。この時の「大声」が「十字架上の第六及び第七の言葉」である。「第六の言葉」は「完了した(tetelestai)」(JN19:30)という叫びである。これは「救い主としての贖いのわざが《完了した》」という勝利の叫びである。しかもこの言葉には「終わった」という意味もある。キリストの「終わった」という叫びと共に、神の御子が父なる神に「見捨てられる」という恐るべき暗黒の時が「終わった」。同時に、十字架の壮絶な苦しみも「終わった」。更にこの言葉には「成就した」という意味もある。キリストの十字架の死によって神の救いのご計画が「成就した」のである。この主イエスの叫びは、「完了した」「終わった」「成就した」という三重の意味が込められた叫びであった。

(4)「終わった！」というキリストの叫びと共に、それまで全地を覆っていた暗闇も「終わった」。明るい太陽の光が辺りを照らし始めた。その光の方へと目を向けながらキリストは最後の力を振り絞って、「大声をあげて」こう祈った；「父よ。わが霊を御手にゆだねます」と。これが「第七の言葉」である。この場面をルカはこう記している；「イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。」(LK23:46)。

「大声で叫んで言われた」とある。これは勝利の叫びである。あの第四の叫び「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」という絶望と悲しみの叫びとは正反対の、勝利と喜びの叫びである。キリストは「大声で」、「父よ」と「叫んだ」。この叫びは単なる叫びではない。「父なる神」への祈りである。キリストの最後の言葉は「父なる神への祈り」だった。「十字架上の第一の言葉」も「父よ、彼らを赦したまえ」という祈りであった。「十字架上の七つの言葉」は「父よ」という神への祈りで始まり、「父よ」という神への祈りで終わった。

キリストの臨終の言葉は祈りだった。曾子(前6世紀)は、「鳥のまさに死なんとするや、その鳴くこと哀し。人のまさに死なんとするや、その言うこと善し」と言ったが、キリストが「まさに死なんとする」時に言った言葉は、「父よ。わたしの

霊をあなたの御手に委ねます」という「祈り」であった。ジェームズ・ストーカーは、「わが霊を永遠なる神のもとに運ぶ車として、この祈り以上に輝かしいものを望むことができようか」と言った。

主イエスは、「父よ。わたしの霊をあなたの御手に委ねます」と祈ってから静かに「息を引き取られた」。神の御子キリストは、永遠なる御方である「父の御手」に全てを委ねて「息を引き取られた」のである。

【結び】主イエスから目を離さず(ヘブル 12:2)；

(1)こうして主イエスの十字架の苦しみは「終わった」。主イエスは、人類の救済という大事業を「成就した」。贖いのみわざは「完了した」。こうしてすべてを成し遂げた主イエスは、すべてを「父なる神の御手に委ねて、息を引き取られた」のである。

十字架は悲惨で残酷である。言語を絶する苦しみの中で、人々の罵りと嘲りに晒されつつ、屈辱的な死を遂げるのである。しかし、主イエスの魂は勝利と平安に包まれていた。主イエスはご自分の死が、人類救済という大事業を「成就する」ために飲み干さねばならない「杯」であることを知っておられた。あのゲッセマネの園でキリストは、「父よ、みこころならばこの杯を取り除いて下さい。けれども、それがあなたの御心ならその杯を飲み干すつもりです。御心のままになさって下さい」という祈りをした。今、キリストは、その杯を飲み干した；人類を罪と滅びから救うために、主は最期の最後まで、十字架の苦しみと辱めとを耐え忍ばれた。主の救いのみわざは「完了した；成就した」のである。こうして主イエスは、「父よ、わが霊を御手に委ねます」との最後の言葉を残して「息を引き取られた」。

こうして主イエスは、父なる神のもとへ帰ってゆかれた。それは勝利の凱旋帰国であった。十字架の苦しみをくぐり抜けて主は、永遠の勝利を携えて父なる神のもとへ帰って行かれたのである。

(2)主イエスは、私達のために、私達を罪と滅びから救うために、十字架の苦し

みを耐え忍び、十字架に死なれたのである。だから、主イエスの十字架の苦しみは、私達にとって大いなる慰めなのである。そして慰めであると同時に大いなる希望でもある。なぜなら私達の人生は、小さな意味ではあるが、十字架を背負って歩く人生だからである。キリストの十字架の苦しみとは比較にならないけれども、私達の人生も苦しみ絶えないからである。主イエスもこう仰っている；「あなた方は世にあっては患難があります」(Jn16:33)と。この世にある限り、患難があり、悩みがあり、苦しみがある。けれども、そうした患難や苦しみ・悩みの只中で、カルバリーの十字架を見上げることができる。ゴルゴタの丘を包んだあの「闇」の中に聳え立つ十字架のキリストを見上げることができる。十字架の上には、私達のために苦しみを耐え、私達の罪のために死なれた救い主がおられるのである。

(3)あの日、十字架を覆っていた「闇」は、キリストの勝利の叫びと共に消え去った。そして新しい光が差し込んで来た。そのように、私達の人生を覆う患難や苦しみという「闇」も、キリストの勝利の叫びを聞くことによって消え去り、新しい光に包まれるのである。患難に押しつぶされそうになる私達にキリストはこう仰っている；「あなた方は世にあっては患難があります。しかし勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」(ヨハネ16:33節)。

私達のために十字架に死なれた主イエスから目を離さずに歩いて行こう。聖書はこう告げている；「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」…『へブル人への手紙』12章2節◇